

アメリカ大学図書館における日本関連蔵書に関する報告

—ハーバード大学とメリーランド大学を中心に—

マイケル・クローニン

はじめに

アメリカにおける州立大学及び私立大学の図書館には、東アジアに関する貴重な蔵書を所有しているところはいくつかある。これらの大学図書館には、日本語の文献及び日本に関する英語の文献が多く所蔵されている。代表的なところでは、マサチューセッツ州ケンブリッジ市のハーバード大学、ニューヨーク市のコロンビア大学、ミシガン州アナーバー市のミシガン大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校が挙げられる。これら以外にも、ワシントン州シアトル市のワシントン大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校、イリノイ州のシカゴ大学、ニュージャージー州のプリンストン大学などは、注目に値する蔵書を所有している。

大学図書館の蔵書は、様々な歴史的・経済的要因に影響されており、日本語の蔵書も例外ではない。例えば、日本が世界的な経済大国へ成長を遂げた1970年代から80年代にかけては、アメリカの大学において日本をより深く理解しようという気運が高まり、日本研究のプログラムが新設・拡大されたり、日本関連の文献の充実が図られたりした。しかし、90年代以降日本経済が下火になると、アメリカの大学における日本研究はかつての勢いを失い、日本研究プログラムの縮小・閉鎖、日本関連の研究資金の減額も起こっている。概して、研究を重視する大規模校（ハーバードなどの私立大学、及びメリーランド大学やミシガン大学などの、州立大学の中でも旗艦校として位置づけられているところ）は、現在でも潤沢な資金で日本関連の蔵書の拡充が図られているが、小規模な私立大学や旗艦校以外の州立大学では、日本研究に充てられる資金は非常に限られている。これらの大学図書館では、日本関連の蔵書があったとしても、数は少なく、在職教員の専門分野にかたよっている場合が多い。

もちろん、研究系大規模校の図書館といえども、日本関連の文献が包括的に所蔵されているわけではなく、蔵書カタログを見れば、ある一定の傾向が認められる。たとえば、文学に関して見てみれば、アメリカにおいてはどのような作家が重視され、どのような作家が重視されないのかが分かり、これは日本における評価と必ずしも一致しない。近松門左衛門は、言うまでもなく、アメリカの大学の図書館でも十分に評価されている。たとえば、前述の8つの大学図書館はすべて、1993年から95年にかけて岩波から出版された『近松浄瑠璃集』を所蔵している。これらの大学図書館では、以前の版を持ちながら最新版も取得している場合が多い。しかし、日本では重要視されながらアメリカではされない作家も存在する。1970年に講談社から出版された『織田作之助全集』は、前述の8つの大学図書館のうち所有しているのは、4校（ハーバード大、コロンビア大、ミシガン大、カリフォルニア大・サンディエゴ校）の

みであり、これら4校のうち開架で閲覧可能なのはハーバードのみである（他の3校の場合、書庫保管されている）。大阪関連の文献でそれほど知名度の高くない『小出権重随筆集』を所有しているのは、上記の8つの大学図書館のうち、3校（ハーバード大、コロンビア大、ワシントン大）のみである。比較して、『久保田万太郎全集』（東京：中央公論社、昭和42-43〔1967-1968〕）は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校以外のすべてが所有している。久保田はもちろん東京について執筆した著名な作家である。以上のことから、アメリカの大学図書館の蔵書の傾向として言えるのは、東京関連の作家に関しては充実しているが、他都市関連の作家は軽視されているという点である。これは、アメリカの日本研究における東京中心主義という、より大きな問題を示唆しているかもしれない。

しかし、アメリカの大学図書館が日本から訪問する研究者にとって興味深い、貴重な資料を所有しているのは、疑いのない事実である。また、大阪文学・文化に関する資料も豊富である。これらの大学図書館では、日本では入手困難なものを発見できる可能性がある。また、アメリカ大学図書館は、日本の図書館と比較して、閲覧・複写・撮影などの規則が概してゆるやかであるため、貴重資料を直に手に取ってみることもできる。州立大学図書館は、基本的に誰でも利用が可能である。私立大学図書館の利用は、教職員・学生、及び客員研究員など利用者登録を行っているものに限られているが、蔵書カタログはインターネット上で検索可能であり、手続きを踏めば部外者でも閲覧が許されることもある。

ここでは、大阪文学・文化に関する貴重資料を所有する東海岸にある2つの大学図書館—ハーバード大学のハーバード燕京図書館とメリーランド大学カレッジパーク校のゴードン・W・プランゲ文庫—に焦点を当てて報告する。

ハーバード燕京図書館

1636年創立のハーバード大学は、米国における最古の高等教育機関であり、370億ドルの寄付金を誇る、世界で最も豊かな大学である。ハーバードにはライシャワー日本研究所があり、「日本に関する研究を援助し、関連する学術的活動や意見交換のための場を提供する」（研究所ホームページ）ことを目的としている。ハーバードは、中国研究のためのフェアバンク中国研究センター、及び韓国朝鮮研究のためのコリア研究所の本拠地でもある。また、東アジア関連の教員も多く、その分野は文学、歴史学から社会学、政治学など様々である。このことから、ハーバードは、米国における東アジア研究の一大拠点となっている。

ハーバードの燕京図書館は、1928年、ハーバード燕京研究所（当時はハーバードから独立した機関であった）の中国・日本図書館として設立された。当時、この図書館の蔵書を構成するコレクションには次のふたつがあった。ひとつは、中国出身の学者、戈鯤化によって寄贈されたコレクションである。戈鯤化は、1879年、中国との貿易に携わっていたボストンの人々によって中国語教育のために招へいされ、米国へ渡った。もうひとつは、東京帝国大学の教員であった二人の日本人、服部宇之吉と姉崎正が寄贈した中国学と仏教に関するコレクションである。彼らは1914年にハーバードで講演を行っており、それがコレクション寄贈のきっかけになった。燕京図書館が現在の名称となったのは、1965年であり、それから数十年をかけて百万点の蔵書を所蔵するにいたった。今日では、「欧米における東アジア研究のための最大規模の大学図書館」（ハーバードのホームページ）であり、日本語・中国語だけではなく、朝鮮

語、ベトナム語、チベット語、モンゴル語、そして満州語の蔵書も所蔵している。

日本語のコレクションには、古書の愛好家、及び大阪文学・文化の研究者にとっては興味深い近世の出版物が多く含まれている。この中でも、大阪出身の寺島良安による『倭漢三才図会』は特筆すべきで、図書館の蔵書カタログでは、正徳5年（1715年）——この膨大な書物の出版が始まった2年後——の出版とされている。105巻にも及ぶこの百科事典は、明時代の王圻による『三才図会』をもとにしている。『三才図会』では、世界各地の人物、地理、動植物、習慣、生活などに関して詳細な記述がなされており、寺島良安はこれに触発されて、和漢の様々な事象を絵入りで説明する『和漢三才図会』を仕上げた。寺島の扱った事象には、空想上のものも多数含まれており、当時の知識人の世界観を知る上で貴重な資料となっている。

ハーバード燕京図書館において利用者登録を行っている利用者は、『和漢三才図会』を希少本コレクションから取り寄せ、直に閲覧することが可能である。取り寄せは非常に簡潔で、わずか1時間ほどで到着する。希少本の閲覧は、図書館3階の閲覧室でのみ可能である。筆記用具の持ち込みは禁止されているが、コンピュータ及びカメラの持ち込みは自由である。私が閲覧した巻は、経年劣化が当然認められるものの、保存状態は極めて良好で、文字・図ともに鮮明、装丁もしっかりしていた。蔵書カタログによると、105巻のうち紛失しているのは1巻のみである。『和漢三才図会』は様々な形で再販されているため、その内容を見聞きすることは決して珍しくはないかもしれないが、このように原本を手にとって閲覧するというのは特別な体験である。

大阪文学との関連で言えば、ハーバード燕京図書館は、大阪で岡田三郎右衛門によって出版された井原西鶴著『好色一代女』第6巻も所蔵しており、出版年は貞享3年（1686年）となっている。

燕京図書館は、浄瑠璃に関する出版物も多く所蔵しており、これらも歴史的価値の高いものである。インターネットの蔵書カタログにおいて「浄瑠璃」で検索をかけると、221件の資料が該当し、この内、161件は開架、残りは閉架に所蔵されている（閉架の場合、資料要求の手続きをして到着までに数日かかる）。これら浄瑠璃関連の資料の中で最も興味深いのは、18世紀後半、大阪の出版業界で活躍した紙屋與右衛門による『大物船矢倉吉野花矢倉義経千本櫻』である。出版年は明示されていないが、紙屋與右衛門によって出版されていることから、18世紀の出版と見られる。表紙の保存状態はよくないが、内部のページは、汚れや擦れなどの一般的な経年劣化は認められるものの、読むのに全く問題はない。最後のページには、本書が1965年2月23日「Nakao Shosendō」より購入された旨が鉛筆書きにより記されている。

明治24年、大阪で出版された『浄瑠璃圖繪』（全2巻）も興味深い資料のひとつである。本書には、葛飾北斎による三色（黒、青、赤）木版画の複製が収録されている。これらの木版画は、浄瑠璃作品における有名な場面を描いたもので、見開きのもう一方のページにはそれぞれの場面に対応する文章が引用されている。これらの場面の多くは、『女舞剣紅楓』、『妹背山婦女庭訓』、『双蝶々曲輪日記』など、大阪で初演された浄瑠璃作品からのものである。また、本図書館は、上田萬年による『浄瑠璃文句評註にはみやけ』（東京：有朋堂、明治37年）も所蔵している。ここで述べたこれらの浄瑠璃作品はすべて希少本コレクションの一部として保存されている。（注：ハーバードに加えてコロンビア大学も浄瑠璃に関する豊富な蔵書を誇る。コロンビアの図書館は、バーバラ・カーティス・アダチ文楽コレクションを所蔵している。）

これらの古い蔵書に加えて、ハーバード燕京図書館は、大阪近代文学史における代表的な作品も所蔵している。この中でも、非常に珍しいのは、小野十三郎著の詩集『大阪』（東京：赤塚書房、昭和14〔1939〕）の初版本である。1903年大阪に生まれた小野は、東京の大学へ進学し、そこでアナキズム詩運動に傾倒、1923年創刊の詩誌『赤と黒』に精力的に寄稿した。1933年には帰阪し、『大阪』を出版している。この初版本は現在では非常に貴重であり、日本国内でも所蔵しているのは国会図書館及び早稲田大学程度である。大阪近代文学との関連では、ハーバード燕京図書館は織田作之助の『西鶴新論』（大阪、修文館、昭和17年〔1942〕）も所蔵している。

メリーランド大学プランゲ文庫

ハーバードの燕京図書館に加えて、メリーランド大学のゴードン・W・プランゲ文庫も、アメリカ東海岸における日本研究の重要な拠点である。プランゲ文庫は、「世界で最も包括的な占領期日本（1945～1949年）の印刷物のアーカイヴ」（プランゲ文庫ホームページ）であり、この時期占領軍によって検閲の対象となった出版物を所蔵している。ゴードン・W・プランゲは、アイオワ大学によって博士の学位を授与され、1937年から歴史学部の教員としてメリーランド大学に勤務していた。1942年、大学を退職し海軍に入隊、1945年に占領軍の一員として来日した。その直後に除隊したが、1951年まで文民として日本に留まってダグラス・マッカーサーの下で働いた。プランゲ文庫のホームページによると、「1949年、連合軍による日本のメディアの検閲が解かれ、民間検閲支隊が廃止されたとき、プランゲ教授は、民間検閲支隊の資料の歴史的意義を理解し、メリーランド大学への配送を手配した」。

プランゲ文庫は、1945年から49年までの期間に出版された様々な資料を所蔵しており、これには占領期の大阪文化に関する資料も含まれている。たとえば、織田作之助の小説『それでも私は行く』と『土曜夫人』（ともに昭和21年）や短編集『妖婦』（昭和22年）、または評論『可能性の文学』（昭和21年）などの初版、あるいは比較的早期の版があり、現物を手にとって閲覧することができる。織田作の『文楽の人』という論文は、インターネットでも初版が見られる。宇野浩二も大阪と関連の深い作家であり、宇野の回想録『わが文学遍歴』（白鯨書房、昭和24年）もプランゲ文庫に所蔵されている。

民間検閲支隊が出版物を無差別的に検閲の対象としたため、プランゲ文庫では新聞や大衆雑誌から、子ども向けの本、教科書、パンフレットや冊子に至るまで所蔵されている。たとえば、文楽と浄瑠璃に関していえば、プランゲ文庫では、一般的な図書館が所蔵しているような学術的・文学的な資料に加えて、『写真集：文楽』（1947年）や『大阪文楽座人形浄瑠璃芝居』と題された小冊子など、他の図書館では目にする事のない珍しい資料も閲覧できる。

民間検閲支隊が収集した資料は膨大な数にのぼり、これらの資料の整理は現在も進行中である。したがって、インターネットの蔵書カタログに含まれていない資料も多数存在する。たとえば、武田麟太郎作品の初版本も、インターネットの検索では出てこない資料のひとつである。プランゲ文庫は、手続きを踏み予約をすれば誰でも利用可能であるので、直に出向いてこのような貴重資料を探索することは、研究者にとって非常に意義深い体験となるかもしれない。